

今回の候補作品で感じたのは、長編と短編という区別がきちんとついている作品が多かったことでした。長編と短編とでは、作品世界の切り取り方が違い、作品の狙いも異なってきます。従来は、「なんとなく短編」「書いた結果、長編になってしまった」というような作品も少なからずありましたが、その点で今回は、長編もしくは短編としての戦略を定めて書かれていると感じました。これについては、歴代の入選作品なども大いに参考にしてほしいと思います。

最優秀賞の「stand by…」は、見事な作品でした。その見事さの第一は、長編としての構成力にあります。警備会社の契約社員である佐伯の日常の中に挟み込まれる、広告デザイナーである「男」の優雅な日々。こうした構成の仕方は現代小説ではむしろお馴染みではあるのですが、相当な「計算」が必要であり、それがぴたりと合っていました。これは好みの問題かも知れませんが、作中の子ども像が TV ドラマの子役のようで、やや出来すぎの感もしましたが、長編としてのスケールを十分に備えていて、読者として楽しませてもらえました。

優秀賞の「雨が降った理由」は、まず文章のうまさに惹かれました。というか、そうでなければ、こういう作品は作品になりません。なんの説明もなく次々に展開していくドラマ……。読者はいつのまにか、〈僕〉と共に不思議な世界に入り込んだようなドキドキ感におそわれます。ただ、16枚目の「現代人の心の中を具現化した場所」という言葉は、そこまでの作品世界を一気に説明にしてしまった感がありました。とはいえ、言葉によって世界が形作られていく、そのイメージの喚起力は抜群でした。

奨励賞の「クリームソーダな関係」は、短編らしい切れ味の作品でした。なにより「クリームちゃん」「ソーダちゃん」の名づけが絶妙。その会話に聞き耳を立てていたわけではないだろうけど、しっかり耳に入ってくるという距離感もよく伝わってきます。二人の会話も「ああ、結構そういう話って、なにげなくしていること、あるよね」といったリアリティがありました。ラストにもう一工夫あると、さらに切れ味が増したと思います。

その他では、SF的な設定の「この世界の外へ」、ちょっと宮沢賢治を思い出させるメルヘン風ファンタジー「天の川ポンプ」が印象に残りました。

今回は身近なテーマ設定が良かったのか、論説の応募が例年より多く、それぞれに楽しく読みました。確かに、学校という場所はある意味究極のお仕着せのようなところですが、そこに新しい科目を付け加えるということでは、もう少し意外性のある提案を読みたかった気がします。